

目次

はじめに いま「福祉思想」というテーマを考えることの意味

1. 社会保障の発展と社会の危機

- 1) 社会保障の歴史と福祉観
- 2) 近年の福祉思想と福祉思想研究

2. 近代日本の福祉思想史

- 1) 渋沢栄一から考える福祉思想
 - ①福祉思想としての『論語と算盤』
 - ②慈善・忠恕・親切という福祉思想
- 2) 田子一民から考える福祉思想
 - ①社会連帯という福祉思想
- 3) 留岡幸助から考える福祉思想
 - ①自然という福祉思想

3. これからの福祉思想

- 1) 福祉思想と生命
- 2) 生命思想と福祉思想
- 3) 日本の生命思想——二宮尊徳の生命観と社会事業家の福祉思想との関連性

はじめに いま「福祉思想」というテーマを考えることの意味

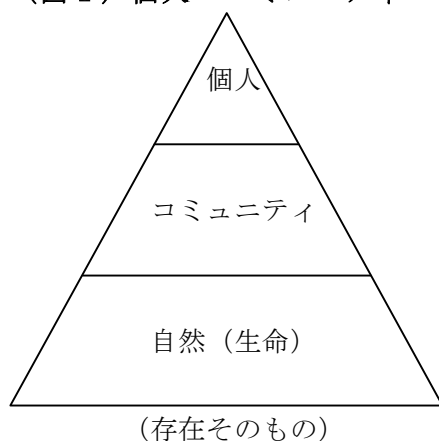
モノがあふれる社会になって人々の物質的な需要はほぼ満たされ、かつてのように経済が無限に拡大するような状況はなくなり、他方で、高齢化や社会保障の問題が典型であるように、富をどのように「分配」するかが中心的なテーマの時代となっている。

現代は、「分配の公正」とは、「平等」とは何かといった根源的なテーマを避けることはできず、政策や制度の議論と並んで、制度の根底にある「福祉思想」についての議論や考察が必要なのではないか。

基本的な準拠枠——3つの次元

根底に「自然（ないし生命）」という次元があり、その上に「コミュニティ」という次元が存在し、さらにその上層に「個人」という次元が存在する。

（図1）個人－コミュニティ－自然（生命）をめぐる構図



1. 社会保障の発展と社会の危機

1) 社会保障の歴史と福祉観

さまざまな福祉思想が歴史的な「危機」の時代に生まれるという把握

表1) 福祉思想の展開とその社会的背景

	福祉制度・社会保障制度	福祉思想	危機の背景
イギリス	エリザベス救貧法（1601）	労働による福祉	商業革命（都市への農民流入）
イギリス	新救貧法（1834）	劣等処遇の福祉	産業革命後の混乱と失業
ドイツ	疾病保険（1883年）	相互扶助による福祉	産業革命後の混乱と失業
アメリカ	社会保障法（1935）	経済対策による福祉	世界大恐慌
イギリス	「社会保険と関連サービス」（1942）	一生を通じ保障する福祉	第二次世界大戦

2) 近年の福祉思想と福祉思想研究

①阿部志郎による福祉の哲学——キリスト教福祉の立場

『福祉の哲学』（2008 年）において、
「施策と実践の統合を模索する努力の過程」と表現する。

②大橋謙策による福祉の哲学——『社会福祉入門』（2012 年）。

1. 博愛の思想
2. ノーマライゼーションやソーシャルインクルージョン（社会的包摂）。
3. 自分たちで相互扶助組織を作ることに対応する（協同組合方式）

③吉田久一『社会福祉思想史入門』（2000 年）

「社会福祉はこの終末期の諸現象の中で、「政策提言」や「福祉サービス」のみ盛んであり、社会福祉の「社会性」や理論は放棄された感がある。そして、日本人の無関心さもあり、社会福祉の「倫理」や「宗教」によるその内側の支えもほとんど見られない」

2. 近代日本の福祉思想史

社会事業：「貧困者、病人、青少年犯罪者等を救済、指導、教化して、健全な社会を形成しようとする事業のこと。慈善事業という言葉に代わり、1920 年代以降から使われはじめた。慈善事業との概念上の違いは、社会事業が国家や公私の団体など、組織化された社会的基盤のもとに行われる点である。第二次大戦以降、社会福祉という言葉が普及・一般化している」（『社会福祉用語辞典』）

表 2) 現代的な公助（公）・共助（共）・自助（私）に対応する三人の思想

	立場	特徴的な主張	軸となる理念
渋沢栄一	民間営利 【私】	道徳と経済の一致	慈善・忠恕
田子一民	政府 【公】	幸福追求としての社会事業	（社会）連帯
留岡幸助	民間非営利【共】	自然の価値の重視	自然

1) 渋沢栄一（1840 - 1931）から考える福祉思想

明治6（1873）年に第一国立銀行を設立

慈善事業の原点 東京養育院の創立（明治5年（1872））

1908年 中央慈善協会（現在の全国社会福祉協議会）の会長

①福祉思想としての『論語と算盤』

「我が日本は、商売が最も振るわぬ。これが振るわねば日本の国富を増進することが出来ぬ」

「国を治め民を救うためには道徳が必要であるから、経済と道徳を調和せねばならぬこととなるのである」

②慈善・忠恕・親切という福祉思想

・「惻隱の心とか或は喜捨施与といふ其一に依つて発動された丈の慈善の方法は、決して此組織的・経済的に働かれて居らぬといふことを、残念ながら申し上げる」

「或る場合には沢山やつたり、或る場合には少しもやらなかつたり、又必要の者にやらずして不必要の者にやつたりする。之を思い付き慈善というふので、決して是は組織的・経済的慈善とは申せぬ」

・「忠恕」という福祉観

「「忠」とは「真直の心」を云ひ、「恕」とは「思ひやり」の事である。此心をもって君に対すれば忠義となり、親に対すれば孝行となる、即ち人たるの道はこの忠恕によつて達するを得るのである、而して此の心は極めて平易に之を云えば「親切心」と云ふ語と同一となる。故にこの親切と云ふ語は最も大切な慈善事業に欠く可ざる心で、殊に収容者換言すれば被救助者に直接するものにとって片時も欠く可らざる肝要な精神である」

渋沢栄一の思想の現代的意義

社会事業には物質だけでなく「忠恕」という精神的なものを重視する
倫理的原理や社会的関係性への配慮を、経済システムあるいは資本主義そのもののものに組み込んでいく必要性

2) 田子一民から考える福祉思想

①社会連帯という福祉思想

「慈善と云ふ言葉は、支那の慈恵の觀念であつて、他人をあはれみ恵む意味であることは言ふまでもない。あはれむと云ふことは地位の高いものが、地位の低いものを、強い者は弱い者を、富めるものは、貧しい者に對して起こす心の状態である」

社会事業とは、「社會生活における自由を與へ不自由を除く社會的、繼續的の努力を總稱する」もの。「この自由と云ふことを幸福と考へてもよい。社會事業は社會生活に於ける幸福を與へ、不幸を除かうとする社會的な繼續的努力であると定義してもよい」

社会事業の五つの要素

- ①出生自由（幸福）事業、②成育自由（幸福）事業、③職業自由（幸福）事業
- ④生活自由（幸福）事業、⑤精神自由（幸福）事業

①出生幸福事業

都市「産院、母親相談所」 郡村「無料産婆」

「公營のものは極めて少数で、大部分は相當の手数料をとるものである」

②成育幸福事業

「私達は子供の教育の爲めには積極的には、その人の體力、精神力に相當した教育を受け、消極的には、教育と身心の發立つに障害になるものを排除して行かなければならないと思ふのである」 背景には児童労働の問題

③職業幸福事業

「職業は生活する爲めに、生活の手段として、之に従事するのではない。職業に従事して活動することは人生であり、幸福なのである」

④生活幸福事業

「社会事業の最も重要視されたのは生活問題そのもの」

「恤救規則も他に積極的社會事業が伴はず、恤救規則自體も救貧の名のない生活を保護する法制に分岐發達せされば、極めて消極的のものである」、「積極的に共存、共榮する思想の缺けて居たかゞ窺はれる」

⑤精神幸福事業

「精神幸福事業と云ふのは餘りに用ゐられない言葉である」

「各個人も社會も、宗教、藝術、美術、音樂の如き積極的施設を望ましく思はれる」

田子一民の思想の現代的意義

幸福を福祉制度に取り込む、積極的福祉の推進

3) 留岡幸助から考える福祉思想

①自然という福祉思想

農業とは「天の力、地の恵」、「自然の力八分、人間の力二分位のもの」

家庭学校 東京巣鴨（明治 32 年 11 月に創立）

当時の巣鴨は「人の子を教育するには又特別に適地であった。加ふるに庭内広くして老樹鬱茂したるが為に、市内と比較しては閑静で誘惑に遠ざかり、私の所謂自然の要素は豊富であった」

留岡の自然観

「私の所謂自然 Nature とは輝く太陽や、数へ切れぬ星や、月や、山や、水や、花や、木や、鳥、獣、さては雨、雪、霧、霜等の四季の変化や、潺々たる瑣かなる小川の流れに至るまで、一切の森羅万象を指して謂ふのである」

「人為的に物質的に発達して来た処の都会が市民の肉体を傷めて病者たらしめ、精神を害うて道徳的不能者たらしめ、其間に不良青少年を作り、又は不良壮老年を造り出すのは怪しむに足らないのである」

「人間社会で悪くなつた者を、人間の多い社会で善くすると云ふ事は、極て六ヶ敷いので、見ることも聞くことが罪惡の種である。それで飽くまで蕪を作らせたり、葱を作らせたりするが宜い。蕪や葱は不良少年に作られたからと云ふて汝が作るのだから成長してやらないと申しますまい。不良少年と雖も正直に労働さへすれば必ず能く出来るに違ひない。其処で不良少年は考へるであらう。人間は我を不良少年として取扱ふけれども、馬鈴薯や葱は我を不良少年と見て居らぬと見へる、如何となれば骨折て劳作さへすれば馬鈴薯も葱も能く出来ると。而して平素懶惰でありし不良少年も大に面白味を感じて仕事に精出すやうになります。是が則ち自然の感化であります」

キリスト教の背景

「形骸ありて精神なき人間は、人にして人に非ず。学校に於けるも亦之に同じく、形式完備するも主義精神神なき学校は学校にして学校にあらざるなり。我が校の精神若くは生命と称すべきものは基督なり。語を換へて之を言えば基督は愛なり、故に家庭学校は愛を以て生命となす」

「我国の慈善問題」

「須らく惻隱の情念より、若くは宗教的情念の熾んなる余りに於て為すべきものなり」

留岡幸助の思想の現代的意義

自然を福祉実践に取り込み、包摂的な支援をすること

個人

共同体

コミュニティ

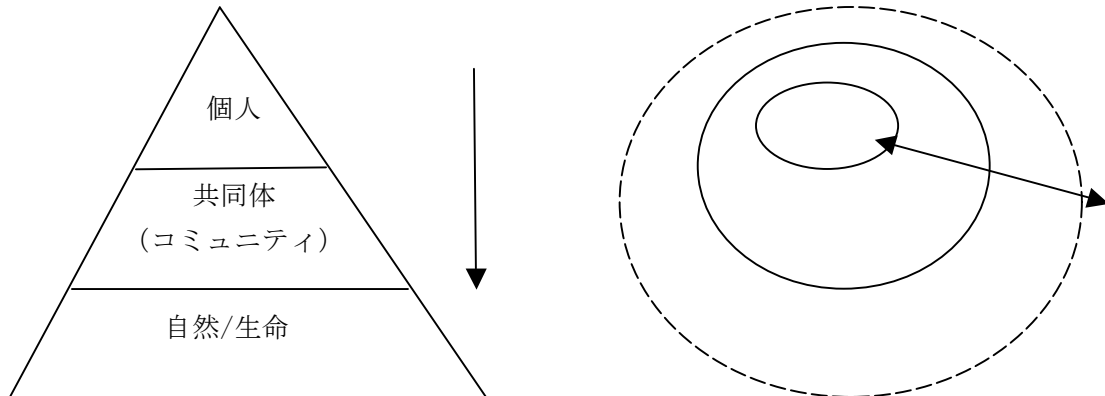
3. これからの福祉思想

自然/生命

1) 福祉思想と生命

社会・個人・共同体での福祉思想から包摂的かつ根本的に福祉思想を考える
連帯（や幸福）の究極的な根拠として「生命」という概念があるのではないか（図2参照）。

（図2）自然・生命によって包摂される個人



2) 生命思想と福祉思想

表3) 生命観の変遷・発展

生命観	主な人物	自然観、主要な概念	背景・危機
機械論的生命	デカルト	機械	宗教的対立
生氣論的生命	ドリーシュ	エンテレキー	機械論への対抗
創造的生命	ベルグソン	創造	機械と生気の対立
熱力学的生命	シュレディンガー	負エントロピー	無秩序への不可逆性
有機体論的生命	ベルタランフィ	システム	生命の法則追求
自己組織的生命	プリコジン	自己組織性	社会、科学の危機

表4) 生命思想と福祉思想の展開と比較

科学・生命思想の展開	福祉思想・制度の展開
	1601 エリザベス救貧法（英）
1628 ハーヴィー『動物の心臓ならびに血液の運動に関する解剖学的研究』	
1637 デカルト『方法序説』	
1748 ラ・メトリー『人間機械論』	1834 新救貧法（英）
1866 ヘッケル『一般形態学』	1874 恤救規則（日本）

	1883 疾病保険（独）
1907 ベルグソン『創造的進化』	1898 留岡幸助『慈善問題』
	1912 井上友一『救済制度要義』
1914 ドリーシュ『生氣論の歴史と理論』	1917 リッチモンド『社会診断』
	1918 フロイト『精神分析入門』
	1922 田子一民『社会事業』
	1927 渋沢栄一『論語と算盤』
	1929 救護法（日本）
1936 オパーリン『地球上における生命の起源』	1935 社会保障法（米）
	1940 ハミルトン『ケースワークの理論と実際』
1944 シュレディンガー『生命とは何か』	1942 ベバリッジ「社会保険及び関連サービス」
1945 ニーダム『中国の科学』	
1948 ウィーナー『サイバネティックス』	1948 世界人権宣言
1954 ベルタランフィ『生命』	1955 ロス『コミュニ・オーガニゼーション』
	1960 ホリス『心理社会療法』
1968 ベルタランフィ『一般システム理論』	1968 糸賀一雄『福祉の思想』
1970 モノー『偶然と必然』	1978 バートレット『社会福祉実践の共通基盤』
	1980 ジャーメイン『エコロジカルソーシャルワーク』 スペクト『社会福祉実践方法の統合化』
1984 プリコジン『混沌からの秩序』	1998 ギデنز『第三の道』

3) 日本の生命思想——二宮尊徳の生命観と社会事業家の福祉思想との関連性

①日本の福祉制度の問題

日本の福祉制度は、二宮尊徳の報徳思想を用いた報徳会（明治 38 に組織された）の活動などが原因（大橋（1991））で発展が遅れた。

内務省官僚・井上友一による「風化行政」は二宮尊徳の報徳思想を利用して福祉制度の代替的役割

「救貧なり防貧なり苛しくも其本旨を達せんと欲せば必らずや先ず其力を社会的風気の善導に効さざるべからず」

救済行政は「風気善導の事、之が真髓」、「物質的救済＝経恤的行政は二の次となる」

「井上らの提唱により組織された報徳会の「教」の 1 つに「推譲」論がある。その「貯蓄といふことと、公益、慈善といふことばを二宮翁の教では合せて推譲といふ一つの言葉で

現はして居ります」

風化的救済制度は、社会事業分野だけではなく、報徳会などと結びつきながら、社会教化の役割を担っており、戦前社会教育の理論的支柱でもあった」

②本来の報徳思想

二宮尊徳の思想的背景

天保7年（1787）に生まれる

4歳の時洪水に遭い田畑が荒地となる

14歳で父を亡くし15歳で母を亡くし、再び洪水に見舞われるなど苦難の幼少時代

その中でも勤労に励む姿が模範的少年となる

③報徳訓

父母根元在天地令名（父母の根元は、天地の命令にあり）

身体根元在父母生育（身体の根元は、父母の養育にあり）

子孫相続在夫婦丹精（子孫の相続は、夫婦の丹精にあり）

父母富貴在祖先勤功（父母の富貴は、祖先の勤勉にあり）

吾身富貴在父母積善（自己の富貴は、父母の善行にあり）

子孫富貴在自己勤労（子孫の富貴は、自己の勤労にあり）

身命長寿在衣食住三（身体の長命は、衣食住の三にあり）

衣食住三在田畠山林（衣食住の三は、田畠山林にあり）

田畠山林在人民勤耕（田畠山林の耕作は、勤耕にあり）

今年衣食在昨年産業（今年の衣食は、昨年の生産にあり）

来年衣食在今年艱難（来年の衣食は、今年の苦労にある）

年々歳々不可忘報徳（年々歳々、報徳を忘れるべからず）

新しい解釈

「人間と自然」「道徳と経済」「人間と自然」「道徳と経済」との哲学的関係を表している

④本来の報徳思想

報徳思想の基本的思想「推譲」という譲り合いの精神は、本来人間と自然との関わり、道徳と経済という関わりの中で考えるべきもの

「風化行政」家族を基本に地域共同体の勤労が奨励されていくといった狭い意味に限定されていた

渋沢栄一 の思想・道徳と経済の調和という考え方と呼応し、また田子一民の連帯を根底から支えるものであり、さらに留岡幸助が重視した自然の意義をさらに包摂的に捉えているという特徴がある。報徳思想は、「自然を含めた連帯」ともいえる。

⑤テツオ・ナジタ『相互扶助の経済 無尽講・報徳の民衆思想史』より

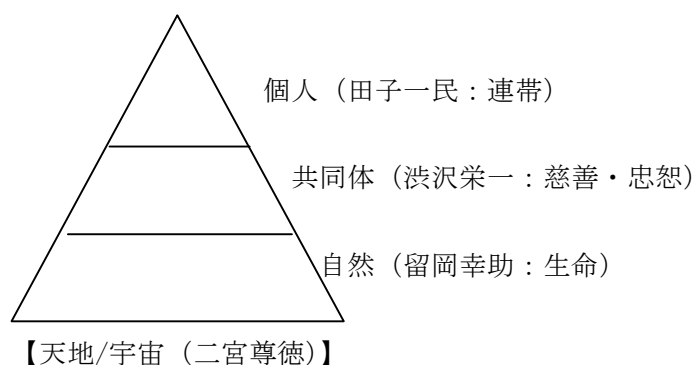
「報徳」の「報」の字は、徳に対する「報い」と解釈されることが多いが、仕事をとおして徳を実現すると解釈するほうがよりよく理解できるのではないだろうか。ある人を他人と違う存在にするものはその人の徳ではなく、その人が実際におこなったことの質である。つまり、その人が自分自身とほかの人びととの生命を育むために、どのように「実践したか」ということ

生命に何らかの主体的な価値を考えるその源流の一つとしてあらためて二宮尊徳の徳・生命観が現代的意義を持っている時代ではないか

表 5) 渋沢・田子・留岡と二宮をめぐる全体的な構造

	立場	特徴的な主張	軸となる理念	関連する主な次元	二宮との接点
渋沢栄一	民間営利 【私】	道徳と経済の一致 親切心	慈善・忠恕	共同体	富国安民思想 道徳門経済門
田子一民	政府 【公】	幸福追求としての 社会事業	(社会) 連帯	個人	推譲 ・ 支え合い
留岡幸助	民間非営利 【共】	自然の価値の重視	自然	自然	法則とすべき は天地の道

(図 3) 福祉思想をめぐる次元と 4 人の関係性



まとめ

今福祉制度に求められていることは、人間の最も根底にある生命の主体性や内発性を根本原理として位置づけ、それを基盤とする制度に転換することではないだろうか。この場合、制度がただ存在していればよいのではなく、臨床の次元にソーシャルワークや社会福祉などがあるように、個々の主体の具体的な状況に応じた保障や支援が行われる必要がある。これからの福祉思想の基本原理として、最も根底の次元から生命の価値を考えることは、それが具体的なサービスという形で提供される臨床の次元につながり、かつそれを社会全体で保障するという制度の次元に結びつけることを通じて、臨床レベルから制度のレ

ベルに至る統一的な理念へとつながる。

さらに具体的に臨床の次元で考えると、これまでの生活モデルを超えて、「生命モデル」とも呼べるような新たな枠組みを構築していくことが展望されるだろう。

しかもそれは、社会事業家たちのように、日本におけるいくつかの福祉思想やそこでの生命観が有する現代的な可能性と共鳴する性格を持っている。

危機的な状況にある現在、「生命」という価値は、福祉思想の新たな基本原理となるのではないだろうか。

参考文献

海村惟一他「21 世紀の哲学としての一元融合思想」国際二宮尊徳思想学会『報徳思想研究の過去と未来』学苑出版社、2006。

阿部志郎・河幹夫『人と社会——福祉の心と哲学の丘』中央法規、2008。

伊東俊太郎編『現代科学思想辞典』講談社現代新書、1971。

井上友一『救済制度要義』博文館、1909 年。

大谷まこと『渋沢栄一の福祉思想英国との対比からその特質を探る』ミネルヴァ書房、2011。

大橋謙策『地域福祉の展開と福祉教育』全国社会福祉協議会、1991。

同『改訂 社会福祉入門』放送大学教育振興会、2012。

兼田麗子『福祉実践にかけた先駆者たち——留岡幸助と大原孫三郎——』藤原書房、2003。

菊池勇夫『社会保障法の形成』有斐閣、1970。

トマス・クーン（中山訳）『科学革命の構造』みすず書房、1971。

渋沢栄一伝記資料刊行会『渋沢栄一伝記資料』渋沢青洲記念財団竜門社、1959-60。

渋沢栄一記念財団編『渋沢栄一を知る辞典』東京堂出版、2012。

島田昌和『渋沢栄一 社会企業家の先駆者』岩波新書、2011。

中央法規出版編『六訂 社会福祉用語辞典』中央法規、2012。

榛村純一「尊徳思想の現代的解釈とその意義」劉金才・草山昭主編『報徳思想と中国文化』学苑出版社、2003。

高瀬善夫『一路白頭ニ到ル—留岡幸助の生涯—』岩波新書、1985。

田子一民『社会事業』白水社、1922。

同『田子一民』白水社、1970。

テツオ・ナジタ（五十嵐監訳 福井訳）『相互扶助の経済 無尽講・報徳の民衆思想史』、みすず書房、2015。

東京都養育院『養育院百二十年史』東京都養育院、1995。

留岡幸助『自然と児童の教養』警醒社書店、1924。

同志社大学人文社会科学研究所編『留岡幸助著作集第一巻』同朋舎、1978-1980。

二宮尊徳「三才報徳金毛録」『二宮尊徳全集』龍溪書舎、1977。

同「報徳訓」『二宮尊徳全集 第一巻』龍溪書舎、1977。

イリヤ・プリゴジン、イザベル・スタンジェール（伏見他訳）『混沌からの秩序』、みすず書房、1987。

吉田久一『社会福祉思想史入門』勁草書房、2000。

以上です。ありがとうございました。